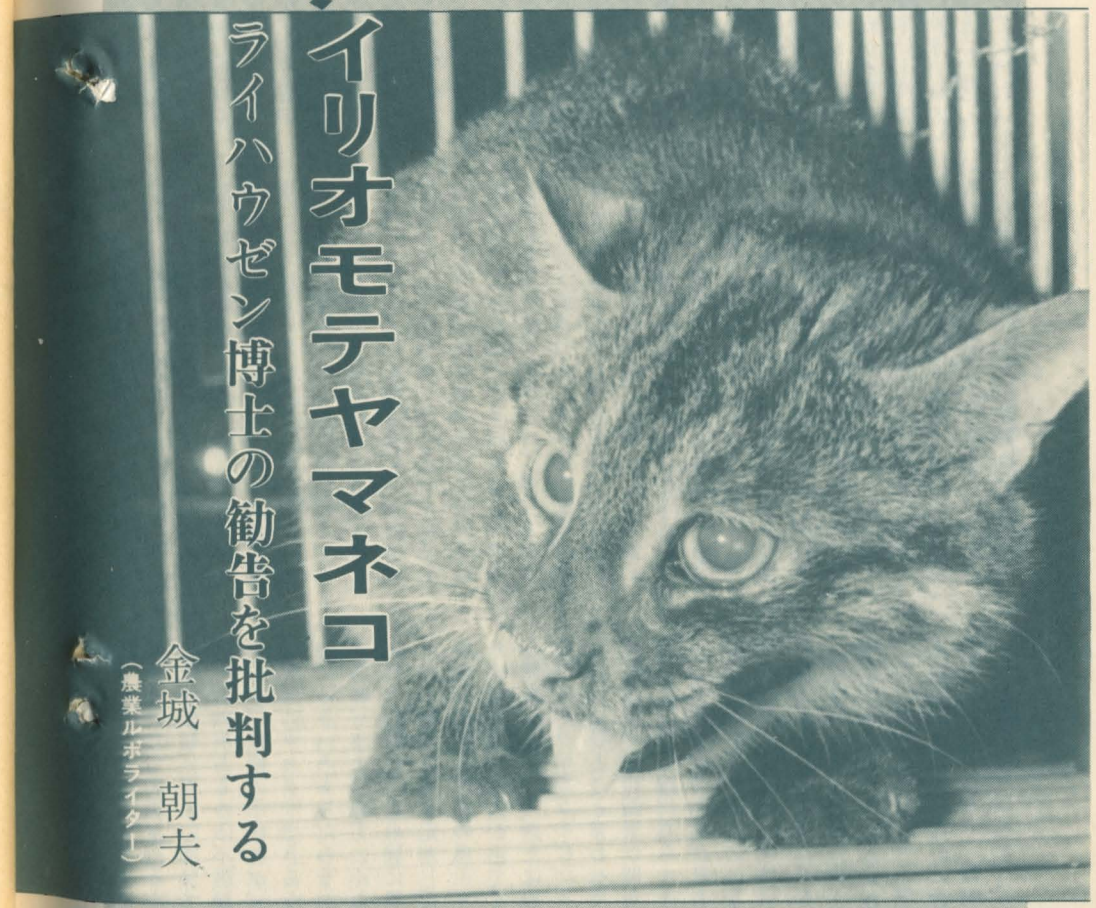
怒る！イリオモテヤマネコ

ライハウゼン博士の勧告を批判する

金城　朝夫
（農業ルポライター）



（写真：琉球新報社提供）

一

いま西表では、わが輩をめぐって世論がふっとうしているようである。問題はイギリス、ドイツ、日本と国際的にからんでいるだけに、そのひろがりも大きいようである。そもそもわが輩と西表の人々との歴史の共有は古い。

西表の人々は、わが輩のことを〝ヤンマヤー〟と呼び、神聖化していた。狩に出る西表の人が、わが輩に出合うと縁起がいいとして、「きょうの狩りを成功させて下さい」と手を合わすことすらあった。しかしわが輩も、えさのとれないときなどは、島民たちの住んでいる里まで下りて来て、にわとりを失敬してお叱りを受けたこともある。それにしても、そんなに険悪な仲までにはいたらなかった。

ところが、都会から偉い人たちが来て、わが輩のことを〝新種〟であるとして必要以上に有名にしてしまったことから、にわかにわが輩の周辺はさわがしくなってしまった。わが輩を守れといったこの偉い人たちは、わが輩たちを調べるために那覇や東京の檻の中にとじ込めたり、ひどい人間になると、わが輩たちの食べ物の中にプラスチックの変なものを入れて生態調査をしたり、どうもわが輩を利権化しようといろいろ手を下している。

わが輩にとっては、この種の人たちとはなじみがないし、また生活を共有したこともなく、あまり好ましくも思っていない。なかには、わが輩の好きなにわとりをえさにして、わが輩の写真を撮る人もいる。それに比べると、これまで共に暮して来た西表の人たちは、わが輩を利用して金儲けをしようとか、有名になろうなどと考えたこともなく、わが輩にとっては大切な西表の共同生活者と思っている。

（写真：琉球新報社提供）

つい先日、わが輩のことで、ネコ類行動生理学研究の世界的権威であるライハウゼンという学者がレポートを書いて、イギリスのエジンバラ公や東京の今泉博士などにレクチュアしたことがマスコミを通して公になり、さらに、そのレポートの内容が明るみになるにつれて、西表の人たちを激怒させた。

去る二月二〇日には〝西表島国設鳥獣保護区設定反対町民大会〟まで開催され、この大会において次のようなスローガンが採択されている。

大会スローガン

一、ヤマネコ優先、人間無視の政策に抗議し、国設鳥獣保護区設定に強く反対する。

一、住民福祉優先の施策を要求し、最低限度の文化的生活を営む権利を確保する。

一、美しい自然を守るために公害のある高那銅鉱採掘に反対する。

一、北岸道路舗装の早期完成の推進。

一、水資源開発を図り土地改良事業の促進。

一、国立公園事務所を西表島に移し住

民との対話を持て。

さらに次の大会宣言が採択されている。

「我々は、ヤマネコ優先、人間無視の保護政策に抗議し……西表にヤマネコが発見されてから学者先生方の提言によってヤマネコ優先の政策に変り開発にブレーキがかかった。……鳥獣保護も自然保護も大切です保護にも努めます……しかし人間が住んでいる限り福祉が優先されなければなりません。」

わが輩にしてみると、ライハウゼン氏やその考えに共鳴している人たちは、どうもわが輩とその仲間である西表の人たちとの関係を敵対させているとしか思われない。わが輩が聞いたうわさによると、あの学者はアフリカでも、地元の住民をおどして〝動物保護〟の名目で追い出したと聞いている。

正直いってわが輩にとって、ライハウゼンという学者より、西表の人間の方が愛着を感じるし、彼とつきあうより、西表の人とのつきあいを大切にした方が、安心した生活ができると思っている。

どうもわが輩と西表の人たちとの間を割いているのは誰なのか、そこをもっとはっきりさせないと、わが輩にとって安住できる条件は整わない。はっきり言ってあまりわが輩のことを有名にしてほしくない。現にわが輩を見ようと人間達がどんどんおしかけてきて落ちついて居られないのである。

二

さて、ここでわが輩たちと生活を共にしている西表の人たちの生活の歴史をたどってみよう。その彼等の怒りに少しでも理解を示したことが学者や行政担当者にあったかを明らかにして、わが輩の将来に関心を持ってほしい。

まず西表の人口がどのように変化していったかを述べてみよう。一九五五年の西表の人口は東部（大原、豊原、大富、古見、美原）が一四八二人、西部（上原、西表、白浜、舟浮）が二四〇五人、合計三八八七人となっている。それが、一九七六年には、東部六〇八人、西部八三八人で合計一四四六人と大幅な減少になっている。二一年間で二四四一人の人間が減少していることになる。これはいかに行政のしわよせが西表の人たちにおおいかぶさったか、という大きなデーターであるとわが輩は思うのである。

この人口の減少についてライハウゼン氏は、「島の全部の生態系は、……数百人以上の人口と共存するには弱すぎる。……農業及びいつまでも増え続ける人口とは相容れないということはまったく確かなことだ。二回目の訪問までは、急速な農地の拡大のきざしはあまりなく、人口はしずかに、ひとりでに解消するものと考えていた」と語る。ライハウゼン氏にいわせると、今、西表でUターンの青年が百人以上も増えたことも罪悪と考えるのである。

さらにひどいことには、彼の西表の人々に対する人間の仲間としての見解である。次の言葉に彼の西表の人々に対する考え方が明らかにされている。曰く。

「島民は、どのような種類の保護計画にも反対していた。彼等は自らを開拓者とみなしており、真実の開拓者としてのすべての美徳と悪徳を示している。……生活は質素であるが場当りで、どん欲で開拓の破壊的側面について正当な理解をもってない。」

わが輩は、西表の開拓者たちの生きざまもよく知っているが、前述のライハウゼン氏の考え方にむしろはげしい怒りをおぼえる。西表の開拓の歴史は古く、遠く琉球王朝時代にさかのぼり、蔡温の政策からその悲劇がはじまる。当時の入植は、開拓などというものでなく、むしろ強制移住で、〝寄人〟といってむしろ棄民でしかなかった。西表周辺の島から強制移住させられた人々は、マラリヤという病気になやまされ、村から村へ渡るには小舟の利用しかできないという、きびしい条件の中で人々は亡んでいった。

この廃村の歴史は、野原（一八九九年）、仲間（一九〇二年）、上原（一九〇三年）、高那（一九一五年）、南風見（一九二六年）、浦内（一九三一年）、そして崎山等と続き、つい最近では一九七一年八月に網取が廃村になった。

東部と西部とを結ぶ道路も昨年にしか完成されておらず、常識では考えられないことが西表ではおこなわれている。

自然保護といっても、地元、西表の人が自然を破壊した歴史はなく、むしろ行政と企業によってわが輩の生活環境を破壊しているのが実状である。

まず大きな例として、パルプ用材として切り出した木材である。あれはたしか、一九五三年、琉球政府と岩崎産業が伐採契約をかわしたことから始まったと思う。そして一九六一年には、八重山開発が進出、一九六七年には一万八千ヘクタールの権利を譲り受け、十条製紙にパルプ用

今にはじまったことではない。あれは一九七三年のことである。西表の西部と東部を結ぶ横断道路（全長一六・三三九㌔、幅五メートル）建設をめぐって環境庁、自然保護団体によって建設中止が呼びかけられ、工事が中止になったときがあった。竹富町の町長はそれに対し「町の方針は変わらない。イリオモテヤマネコの保護より住民福祉を最優先すべきである」と怒りをぶちまけた。そのとき以来、ヤマネコか人間かという言葉が流行した。このヤマネコか人間かという二者択一の考え方は大変危険な考え方だが、いずれにしてもあのとき西表の西部と東部を結んで、今できている周辺道路の建設運動も、この自然保護団体等が進めるべきであったと思う。

そもそも西表は学者たちの研究材料にされているきらいがあり、地元の人々に対する思いやりがあまりにも少なかった。あの東部の西表開発についても一九六〇年頃に〝西表開発〟のために、日米琉の政府によって計画され、大がかりな調査団が組まれ、何度も調査されたが、ついにこの計画は今日になってもなしのつぶてである。おまけに西表の九〇％近くの土地が国有地になっており、その農地の払い下げもなかなか進まず、地元の農民を困らせている。

一昨年、昨年と続いた大型台風のとき、西表の人々が金を借りようにも土地が国有化されていてピンチに立たされたことがある。現に白浜においても家をこわされた人々は家を建てるために金を借りようにも担保がなく、途方にくれている人が後を立たない。

沖縄で二番目に大きい島に住みながら土地を所有することができない西表に対する行政、そしてバカの一つおぼえみたいにただ単にヤマネコとさわぐ学者に対する怒りが、先の〝西表島国設鳥獣保護区設定反対町民大会〟として表われたのであろう。

復帰のどさくさに土地は買い占められる。網取はある大学に無償で渡される。おまけに琉球大学によって、六八五ヘクタールの土地が研究用に確保されるという事態にあった。そのときも地元の農民で組織されている上原地区生産組合連合会、約百戸は一四〇ヘクタールの土地を農家へ払い下げる要求を出したこともあった。

ぼやくつもりは毛頭ないのだが、わが輩が考えるに、西表の外にいる人たちに

材を送り出した。

このパルプ用材の切り出しは大がかりなもので、山頂までケーブルを渡し、アッという間に山はハゲ山に化していった。表向きは琉球松を補植していたものの、管理はズサンで、昔の山にもどる保証はどうもなさそうだ。

わが輩は三年前、次のような話を聞いたことがある。星立という村でのことである。

この村に住む真謝さんという方が民宿を経営していたが、宿が少ないとして新らしい家を建てた。屋根瓦はあるが、それに使う土を自然保護の名のもとに取ることができず、さらにタル木を切り出すこともできず、ついにトタン屋根にしてしまったのである。真謝さんは

「わたしたちはこの村で生を受け、昔から山に入り木を切り出し、土を取って家を作った。それが最近できないのはどうも理解できない。国はここにわれわれが住むことをきらっているのではないか、とうたがいたくなる」と、やり場のない苦情をもらしているのである。

三

わが輩をめぐって問題がおきたことはしてみると、西表の人間はどうもやっかいな存在として見ているきらいがあるのではないかと疑いたくなる。現在、西表にはUターンの青年が百人あまりもおり、つい先だって七年ぶりの青年祭りを開催、七〇人余りの青年が結集した。すばらしい祭りであった。

このUターンの青年たちは西表を文化の島にしようと、植物染料や織物、焼き物の研究にはげんでいる。この若者達の文化村造りをまるでじゃま者あつかいにして、ただヤマネコのみの保護の発想は、部外者のエゴといっても過言ではない。

東京の今泉博士も、ライハウゼン氏の考え方に近く、同氏のレポートも「イリオモテヤマネコの保護にとって最も必要なのは、重要な被食物の保護であるが、……年間千頭前後も捕獲しているイノシシ罠の禁止は、イノシシの個体数をたちまち回復させることであろう。イノシシ罠はヤマネコにとっても極めて危険で、これに掛って死ぬものが、年間二―三頭ではきかない模様である」と述べており、西表の人たちの重要なタンパク源であるイノシシすら獲らせないように進言している。

西表に住む下田医師に言わせると「魚になりタンパク源であるイノシシは西表の人たちにとって重要なものである」として、医者の立場から、これらライハウゼン氏、今泉博士の見解に批判的である。

これまでわが輩が知るかぎりでは、イノシシの捕獲はバランスを保っていると思うし、逆にイノシシの農作物に対する被害は計り知れないものがある。

とにかく、あまりにも西表の実状を知らないこれらのレポートに対する怒りが、あの環境庁の鳥獣保護区設定に対する反対町民大会であった。

幸いこの鳥獣保護区設定は延期され、これから島民へのコンセンサスを得るあらゆる作業が始められることと思うが、わが輩にとって早く西表の人たちからわが輩が愛される環境を作ってもらいたいと切に願うものである。

そしてわが輩は声を大きくして叫びたい。それは、わが輩を真に守ってくれるのは地元西表の人以外にいないということである。またわが輩の仲間である西表の人の福祉ももっと考えてほしい。そしてあまり、わが輩を売りものにしてほしくないということである。

—Fact about Iriomote Island—

〔資料〕

イリオモテヤマネコの保護を

ポール・ライハウゼン

人口

一九七二年　二、〇〇〇人
一九七七年　一、五〇〇人

（東部及び北部海岸線に沿って、北西部と東南部に人口の集中が見られる）集落は第二次大戦後、アメリカ人によるDDT処理によってマラリアが消滅してから後に生まれたものである。

動物相と植物相

動物相　かなりの大きさを持つ哺乳動物としてはイリオモテヤマネコとイリオモテコビトイノシシの二つだけで、どちらとも西表島にしか見られないもので、保護を必要としている。又、両者とも古い形態を有している点で科学的にきわめて興味深いものである。

イリオモテヤマネコは一九六六年に至ってはじめて発見され、東京にある国立科学博物館の今泉博士によって初めて記載された。一九六七年にスタートし、調査と生態学研究は今泉博士と彼の学生達の協力の下で六年の歳月をついやした。

（次ページへ続く）

最初の調査の後、私はＩＵＣＮから日本政府あてに手紙をつきつけた。又私達は日本人大衆にある種の感動をひきおこすことができた。これらのことが原因となって日本政府はこのイリオモテヤマネコを天然記念物に指定し、島のほぼ三分の二をおおう地域を国立公園に指定した。そして調査促進資金を援助することを決定した。

ヤマネコの数は三〇〇と推定された。最初の一年間の研究の後、我々はその数を一五〇に引き下げて修正せざるを得なかった。現在の数は最高で八〇、おそらく実際には四〇以下であると思われる。これらの数は、今泉博士の全詳述を日本の権威者に対して報告された三年半にわたる研究の結果に基づくものである。

減少の原因は、(1)生息場所の破壊…ヤマネコは沼地の低地域と川や小川の周辺しか使用できない。なぜなら丘陵地帯にはえさになる動物が十分にいないからである。広範囲にわたる分析の結果驚いたことには、ヤマネコの食物の主なものは、ワイナ類（オオバン、クロガモ）（二七％）であることがわかった。過去二ヶ年の間に人口の減少にもかかわらず、これらの地域は広く耕作されてしまった。(2)旅行者による妨害…島のちょうど中央部に一つの大きな河があり、年々増える旅行者によって踏みわけ道がつけられている。そして彼らの行動は全く抑制されていない。(3)罠…多くの罠がイノシシのためにしかけられていて、ヤマネコも又この罠に捕えられている。この二―三年で罠の数はいちじるしく増えているのに罠にかかるヤマネコの数は減っている。このことはヤマネコの数が更に減っていることを物語っている。

イノシシ　以前はＳＵＳ　ＳＣＲＯＦＡの単なる亜種にすぎないと考えられていたが、今泉博士の詳しい研究によって、このイノシシが別箇の非常に古い種のものであることが証明された。二年前、その数はおよそ六〇〇と推定された。当時は三人の免許をもった狩猟者と時々密猟する人がいただけだった。今日ではほとんど誰もが罠をしかけるようになっている。（曲げた若木にワイヤーの罠をくくりつけ、足をすくうとワイヤーが足のまわりをしめつけ、獲物を地上から空中にはねあげる仕組のものである）

学説では繁殖期にはイノシシは完全な保護をされていることになっているが、実際には何の処置もほどこされていない。同時に迫害者達は「有害獣」を殺すことを奨励する別の法律によってその権利を与えられている。現在残っているイノシシの数は誰も想像すら出来ない状態である。

しかし、すぐに断固たる措置をとらない限りあと二―三年でイノシシが絶滅してしまうことは疑いのない事実である。

植物相　日本及び中国の自然にマレーの自然が混り、それと同時に八重山に個有のものもさえある。本島は東南アジアにおける最後の自然のままのマングローブ帯をもっている。丘陵部は亜熱帯林におおわれている。

国立公園

前述の私達のはじめの頃の努力に応えて日本政府は島の約三分の二をおおう地域を国立公園化すると宣言した。しかし、日本では国立公園とはいくらか保護された単なる娯楽の場所にしか過ぎない。その上、北東部にただ一ヶ所残されている自然のままの常緑の原生林は国立公園に含まれていない。一九七五年までに地元民のやむことのない陳情の結果、国立公園の範囲は島の半分に減らされ、今年になってわずか三分の一に減らされた。残りの全ては、もし現在の計画が実行されるならば、製紙用の材木切り出しに用いられることに同意がなされ、その後は地元民に解放されることになる。

残りの地域は景色の美しさのためにだけ選ばれたものであり、前述の川沿いの旅行者によって歩かれすぎて峡谷を除けば丘陵地帯なのである。このままではヤマネコの棲息地は全くなくなってしまうだろう。イノシシもほんとに少なくなってしまうだろう。

名目上保護されている地域にも全く何の監視もおかれていない。

三名の職員がいる山林管理事務所は隣の石垣島に設置されている。彼らの話しによれば、西表島には全く足を運ばないということである。それに彼らは興味を持っておらず住民を襲れている。県に対していくら文句を言っても、又現行の諸法規に明らかに違反していることがわかった場合でも完全に黙殺されているのである。

人間集団の有様

当初から島民はどのような種類の保護計画にも反対の態度を示していた。彼らは自らを開拓者と考えており、真の開拓者としての美徳と悪徳の全てをもっている。つまり懸命に働き、その生活態度は慎み深いが、向こう見ずで貪欲であり、開拓の破壊的側面についての正当な理解に欠けている。

動物相と植物相は彼らにとっては開拓の妨げという意味しか持っておらず、野生の保護などというのは馬鹿げたことしか理解されていない。彼らは認識することができないし、又認識しようとしないだろう。

例えばつまり現在計画されている山林伐採は、水源を完全に破壊し、現在でもぎりぎりの生活である彼らの生活基盤をも破壊するというような事実をである。

彼らはもっと多くの人口をひきつけることを望んでいる。（目標一万人）パイナップル等の輸出用果物を栽培し、軽工業を起こし（とは言え、島には原料は何もない。全てのものは何百マイル、いや何千マイル以上も船で輸送されねばならなかったし、同じ道を再輸出されねばならないノ）自らの文明を発展させ、特に良い近代的な学校のシステムを整備することは第一の要求なのである）を望んでいる。現在のところ彼らの不満は子どもが少なすぎ、又先生も少なすぎることである。（小学生は約六〇名しかいない）彼らは主張する。もしもっと人が居れば、もっと多くのより良い先生を、もっと安い個人負担で雇うことができるばかりか、税金の負担も全体的に低くなると。

理論上ではこれらのことは、全てそれ自身理にかなっているように見える。しかし、観光業（それもごく限られた範囲だけの）を除けば、西表島では実際に何もできないのであるから、彼らに出来ることは多くの人々と貧しさを分かちあうことだけである。また地質構造が非常にもろい岩石で風化も進んでいるから森林がなくなれば、破滅的な溶脱がひきおこされる。すでにこの例をいくつも見ることができる。

政治的情況

沖縄の人々は本当の日本民族ではなく、もし機会を与えられればおそらく独立の方へ投票するだろう。東京の中央政府と那覇の県庁の間にはどんな愛情もない。このことは現在の不適当な自然保護の法規でさえ、おおっぴらに無視され、県庁やその下の自治体に対してとった行動の一例を見てもわかる。

現実に、西表のような魅力に乏しい島に入植しなければならない理由はないし、戦前のような神聖な自然保全区として再び元にもどさなければいけないという理由もない。急速な発展途上にある隣りの石垣島はやすやすと西表島から一五〇〇人を受け入れることができ、そこで彼らは、彼らが熱望している快適さと便宜とを享受することができる。

勧告

(1)現行の保護法を強行すること。そのためには警察もしくは然るべき権力をもった森林保護部門を西表島に設置しなければならない。

(2)耕作されずに残っている地域は全て国立公園とすべきである。そしてその地域全域を保護地区にすること。今のところ旅行者の立入を禁ずること。

(3)全ての罠と狩猟行為は例外を除いてただちに禁止すること。例外とは過去二年間の内に逃げ出し野生化したヤギは射殺せねばならない。

(4)家畜としてのネコや犬を持ちこみ飼育することは最少限におさえるべきである。

(5)現在、大量の淡水を仲間川という島最大の川から汲み出して送水管ですぐそばの島（新城島）へ送っているが、それは観光のため開発され、すでに大きなホテルが立ちこの島には水がないせいである。この放水路は仲間川に沿ってあるマングローブをひどくおびやかし、破壊することであろう。この状況の適切な研究が必要である。

(6)中央政府は島への植民とこれ以上の開発を断呼として許可してはならない。

(7)更に政府は島を出ようとする住民に便宜を与え、その土地を買い上げるべきである。現在島に住んでいない個人や会社には土地を入手させないようにすること。

(8)現在ある全ての材木伐り出しについての認可か契約は全て取り消されるべきである。

(9)島内に研究所を設置し、少なくとも一人以上の専従科学者と研究する場所と、一定の目的の研究を完了したなら交代する三人の臨時要員を置くこと。

島の全生物群は大変面白く、又特徴をもつものであるから、可能な限りその様子を十分に研究することが必要である。更に継続した科学的研究が他の何よりも実際の保証に寄与するものとなるであろう。願わくば、島に残る人々の態度も、又時とともに変わられんことを。

結論

私は次のことを強調したい。慎重な研究と考察の結果、この島は余りに狭少で、その全部の生態系が余りに傷つきやすいため、数百人以上の人口が観光事業の食物調達やその保護を預かって共生して生きのびてゆくことはできないということが確認された。

農業と永遠に侵入し続ける人口とが両立しないことは、きわめてはっきりしている。このことは当初の二回の訪問まではまだ私の確信にはなっていなかったし、急速な農業の拡大の兆しもまだそれ程目立ってはいなかった。人口はすでに減少中で、私はその問題も静かに自ずと解決されてゆくだろうと期待していた。

しかし、二回目と今春（一九七七年）三回目の訪問の間の二ヶ年間にすでに生じていた変化は、一つの厳しい衝撃として到来した。

私は今や、少なくとも一部では最少限の時間に最大の破壊を目的とした計画的な策略が存在しており、いかに効果的防御的な法案を制定しようと企てた所で余りにも遅すぎ、それらがお手上げになるような絶望が生じ、「開拓者たち」は、それ以上の障害なしに彼ら自身の道を選ぶことができるようになることを確信している。

まだ救える。しかし、（それは）断固として今年から開始され、ひるむことなく続行されなければならない。